

総合討論

<鳩貝>

総合討論の進め方であるが、まず、パネリストの先生方から一言ずつお話をいただき、パネリストの先生方の間で、若干のやりとりをしてから、参加者の皆さんとの討論をしていきたい。

まずはじめに、小田豊先生であるが、小田先生は、現在国立教育政策研究所の次長をされており、前任は、文部科学省の幼稚園教育の教科調査官をされ、主任視学官を経て現在に至っている。

無藤隆先生であるが、無藤先生は、現在、白梅学園短期大学学長で、長い間、お茶の水女子大学で研究に当たっておられた。専門は、発達心理学である。その間、文部科学省の幼児教育にかかわる、各種委員会の委員としても活躍されていた。現在の教育にかかわる様々な答申にも大きな影響を与えておられる。

まず、小田先生から自己紹介をかねてお話しをいただきたい。

<小田>

飼育動物にかかわる学校との関係については、素人以下の知識しか持ち合わせていない。また、皆さんは動物が好きなのであるが、私は正直申し上げて苦手である。私がいちばん好きなのは人間で、次が動物だと思っている。人間が好きだから、子どもの教育に携わっているわけである。その中で、良かれと思ってやっていることでも、子どもたちに迷惑をかけてしまうことも多々ある。今日のお話を聞いていても、動物に非常に迷惑をかけているということがよくわかった。子どもは動物が好きであることは承知しているが、飼育方法などを間違えると、子どもたちばかりではなく、動物にも大変迷惑をかけてしまうということであると思う。

<無藤>

私は、この全国学校飼育動物研究会の運営委員でもある。そのようないきさつから、中川先生とはいろいろお話しをさせていただいており、今日のお話のような内容を聞いたり、写真を見せていただいたりしている。その中で、私は大変ショックを感じている。一つには、動物が劣悪な飼育環境で飼育されているということと、それを見た子どもたちがたいへんなショックを感じているということである。そしてもう一つは、そのようなひど

い状態になっているということに、学校関係者が、私も含めて気づいていなかったということである。ここに参集いただいている関係者のかたがたは、そのことに気づき始めているわけであるが、まだまだ日本中のことを考えると、憂うべき状況がたくさんあるのが現状で、これらを一つ一つ変えていかなければならないと思う。

子ども、老人、障害者は、それぞれ共通しているところがあると考えている。それは、共通してルールが守れないということである。このことは、社会生活上いろいろなことができないということであるが、一言で言うと、きたないということである。きたないということは、今の世の中では、犯罪以上いけないことであるという考えがされているが、きたないということの具体的な表れが、糞であり尿である。それらを我々は社会的に排除しようとしている。確かにそれは快適ではある。その排除の中に動物の糞や尿も含まれている。そこで、ペットの飼い方もだんだん水族館化、すなわちガラスの外から見るように、きたなくない、臭わない飼い方になってきているようである。しかし、このようなことは、何か根本的におかしいことであると思う。このような感性の行き着くところは、子どもや老人や障害者を排除する世の中になってしまうのではないかと思う。

<佐藤>

幼稚園の中では、小動物がペットではなく仲間という意識が強いように思う。2歳くらいまではぬいぐるみをただ抱いているだけだったのが、3歳くらいになるとぬいぐるみに話しかけたりし、実際に動物とふれるようになって、それが命あるものと気づいたときに、



もっとふれあいが広がってくる。そういう意味では、小動物が幼稚園の中にいる意義というのを感じている。

<竜田>

先ほど、前任校の話を少しだけしたが、前任校で動物との関わりに関するエピソードが二つあった。一つは、子どもが、学校の裏に倒れていたイヌを拾ってきた。そばに行ったらものすごい臭いがする。よく見ると全身が膿でどろどろになっている状態だった。近所の獣医師さんの所につれていったら、「アカルス」というダニにやられているということだった。獣医師には安楽死を勧められたが、子どもたちはどうしても助けてくれと懇願してきたので、そのことを獣医師に話した。すると、次のことを毎日やるように伝えられた。毎日風呂に入れる。毎日薬を塗る。1週間に一回、注射を打つ。これらを半年ほど続ける。子どもとの約束だったので、半年続けることによって、病気は治った。その後、私が飼うことにして、毎日イヌと一緒に通学していた。イヌは校長室に置いておいたが、子どもたちがひっきりなしに訪ねてきたりして、学校の大人の人気者になった。そして、現在の学校に異動になったときにイヌも一緒に異動してきた。前任校に顔を出しても、子どもたちはイヌのことしか聞いてこなかった。イヌと子どもたちのつながりの濃さに驚かされた。また、教室にうまくとけ込めないような子どもも、校長室でイヌに話しかけると、満足そうな顔になって教室に戻っていくようなこともあった。今も、職員室でウサギを1羽飼っているが、やはり教室にとけ込めないような子どもが職員室に来てウサギをしばらく抱いていると、柔らかい表情になって教室に戻っていくこともある。こういう姿を見ていると、動物と子どもたちの関わりというものは、非常に強いものがあると感じた。今日発表の中でお話しした飼育委員は、現在中3であるが、今でも、飼育舎が心配だと言って見に来たりしている。

<中川>

私は人間より動物の方が好きなのではないかと思われているかもしれないが、今、どうしてこのような活動をしているのかを考えてみると、自分で子どもを4人産んで育てた経験があることが大きな原因となっている。自分自身のことを考えると、動物より子どもの方が好きであることは確かだ。私がいちばんに言いたいのは、自分の意志を表現できない

動物を、ひどい状況に置いておいて、それを平気で子どもに見せているということが大きな問題であるということである。子どもはそれを見て悩み、2年前の状況を思い出して泣いてしまうというくらい、大きなショックを受けている現状がある。このような悪い影響を子どもたちに与えてしまうということを、学校は知っていてほしいと思う。しかし、実際に先生方は、自分でも飼育の経験が少なかったり、大学でも飼育のしかたを習ってきていなかったり、という現状があるので、そのような学校を助けてあげたいという気持ちから、今の活動をしている。ただ、多くの学校では、自分たちだけで何とかしようと考え、学校外の人たちには手伝ってもらいたくないと思っている。そういう学校では、それなりに勉強もしているようであるが、獣医師にちょっと相談してくれるだけで解決できるようなことがたくさんある。このように、気軽に獣医師に相談できる体制を作ることができればと言う思いで活動していると理解していただければと思う。

<鳩貝>

私は、国立教育政策研究所で生きもの教育を担当している。その立場で言うと、生物は、実験や観察の材料である。先日も中川先生から指摘を受けたが、生きものは死んでも代わりがあるからいいだろうという、冷めた目で、生物の教師は生きものを見ている場合が多い。しかし、子どもたちはもっと違う感性をもって命というものを感じている。しかし、生物の教師はその感性を無視をして平然としている。このようなことに、中川先生と知り合ってお話しをする中で気づかされた。そして、学校の教師が、このようなことをきちんと理解していかなければいけない。実際に、生きものを飼って、それがひどい状態であるということに対しての認識がない。だから、生まれるのも死ぬのも自然だなどという考えが、平気でまかり通っている。こういう現状をもっと変えていく必要があるということで、研究会を立ち上げてきた。そして、先生方のいろいろなお話にもあったように、きちんとした飼育をし、正しい関わりをもたせることで子どもが変わる。子どもだけではなく、子どもが変わることによって、先生方も親も変わる、地域も変わる、教育も変わる、ということであろうと考えます。したがって、こういうことが、学校教育の中でいちばん基本であり、言葉だけではなく、実物をとおして、



命の大切さを伝えることがいかに大切であるかということ、本日の発表を聞いていただいております。ありがとうございます。

<藤原> (大学4年)

現在魚類を飼育しており、子どもたちに命の大切さを教えたいと思っている。魚類は、ただ飼っているだけでは、命の大切さを教えるににくいのではないかなと思う。時として魚は死んでしまうが、そこからどのようにして命の大切さを教えたらいいのだろうか。死んだ魚を埋めてただ「かわいそうだね」というだけではなく、そこから、どのようにして子どもたちに命の大切さを教えたらいいのか、教えてほしい。

<朝比奈> (北大大学院)

修士論文をつくる中で、子ども時代に動物を飼った人たちに聞き取りをした。その中で特徴的だったことは、その子が動物のマスターであったということ、そして、生きたおもちゃ扱いをしているということだった。それが年齢によるものなのか、その子独自のかかわり方なのか、すなわち個人差であるということなのか、区別が付かなかったので教えてほしい。

<中川>



教室の中で動物を飼育するとき、動物を飼うことによって子どもたちが変化したかどうかということについての調査結果がある。その中で、魚類とほ乳類などの数種類の動物種に分けたときに、ほ乳類であれば、全ての先生方が、子どもたちに変化があったといっているが、魚類の方は、子どもに対する影響はわからないという結果となった。子どもにとって、入りやすい動物というものがあり、かわいいと思う、愛着のわく動物、という意味では、ほ乳類がもっとも適していると思う。お話しのように、魚を飼って、しかもそれがどんどん死んでいるということであれば、命の大切さを教えるということにはまったくなっていないと思う。魚は死ぬのが当たり前だという感覚を植え付けているに過ぎないのではないかな。飼っているその特定の魚に対して、特別な愛着があるのならまだしも、そうでなければ、命の大切さを教えることは難しい。

それから、生きた動物をおもちゃのように扱うということであるが、それは、年齢が影響していることもあると思う。3歳くらいまでは、生きものを生きものとして理解することはできない。4歳くらいになってようやく、生きものとして理解することができるようになる。また、おもちゃのように扱う子どものまわりには、そのようにしてもいいという大人がいるのではないかなと思う。私たちがふれあい教室を行うときには、必ず動物の気持ちを考えさせてからふれあわせるようにしている。ある事例でいうと、小学校でモルモットを飼ったとき、モルモットにリボンを結んで散歩をさせるということをした子があった。先生はかわいそうだと思いながらも、子どもが愛着をもってやっていることだからということで、そのままにしておいた。そこで、獣医師が紙芝居で、動物も怖がることもあるという話を聞かせたら、それから、モルモットを散歩させることは、黙っていてもやらなくなった。これは、気づきであるということであるが、裏返していえば、乳飲み子を幼児がひもをつけて引っ張っていたのを見て、幼児が気づくまで見ているということはある。やはり、適切な言葉がけをして、動物の言葉を代弁して話をするということも必要なのではないかなと思う。

<無藤>

最初は動物をおもちゃのように扱うことから、だんだん生きものとして大切にしていこうという行動までたどり着くのは、時間の経過

によるものだと思う。ただ、放っておいて自然にそうなるとは限らないので、飼い方やふれあい方を適切に教えてあげることが必要だと思う。そして大切なのが、適切に飼うモデルがまわりにあることである。このように、指導をどのように行うかということが、とても大切な要素であり、この会でもそのような研究をすることが必要だと考える。

<佐藤>

気持ちを落ち着かせたいと考える子どもが金魚をずっと見ているという場面をよく見かける。熱帯魚の場合には、きれいだということもあると思うが、自分の気に入った魚の動きをよく追いかけている場面を見かける。ハムスターなどの場合は、先生がいつも気にかけて、過剰に強く握ったり、踏みつけたりしないように注意している。先生の側にこのような配慮が必要なのではないかと思う。

<鳩貝>

私は農家の育ちなので、生きもの飼育は愛情をもって行うというよりむしろ、生活するために行うという考えだった。小さいときはウサギを何羽も飼っていたが、それを売って小遣い稼ぎにもなった。そのときは、愛情をかけるということではなく、今思えば、ひどい扱いをしていたと思う。したがって、これまでの動物に対する扱いは、農家のような事情が多分にあったことに起因するものであると思う。しかし、これからの飼育動物とのかかわりを考えた場合、学校や家庭では、農家がかつて行っていたような扱いとは全く別の扱いをしなければいけないということを、大人たちは自覚しなければならないのではないかと思う。地方の方に行けば、農家の方々が、昔のやり方で動物たちを扱って、これでいいんだと教える場合もあるだろうし、獣医師さんたちでも、大動物を扱っている方々の場合は、小動物の扱い方に対する考え方が違うと思う。したがって、社会の変化について、われわれはきちんと理解しておく必要があるのではないかと思う。私自身、この研究会をとおして、動物たちに対する考え方が大きく変わり、動物たちを仲間としてみていかなければならないと考えるようになった。

【学校等の先生方】

<金子> (横浜市の教員)

私は、飼育委員会の担当で、飼育動物についていろいろ教えていただきたくて参加した。今日のお話を聞いていて、動物をかわいがるということが、子どもたちの心を豊かに

するんだということがわかった。私の学校では、飼育委員のなり手がなくて、先生の中にもアレルギーがあったりとか、死んだときの処理が嫌だとか、休みの日でも世話をしに来なければいけないなどということで、なかなか飼育担当を買って出る先生がいない現状である。今はウサギとニワトリと熱帯魚を飼っているが、休みの日の世話が難しく、3日間の連休の時は、休みの前日にたくさんエサをあげて凌いでもらっているという状況で、動物には大変申し訳ないことをしている。先ほど、竜田先生のお話を伺っていて聞きたいことがある。ボランティアの方をお願いする場合、事故などに対する補償などがあるのか、また、教員と一緒に参加するのか、鍵の管理をどうしているのか伺いたい。また、中川先生にお伺いしたいことは、獣医師さんに動物を診てもらうときに、薬などもくださるが、治療代をお支払いできない。このことに対して、獣医師さんとしてどうお考えなのか、本音の所を教えていただきたい。

<竜田>

ボランティアの保険のことについては、最初はPTAが加入している保険と同じものに加入してもらっていた。その後、学校の方に移管されたので、教育委員会と相談の上、ボランティア保険に入ってもらった。鍵の管理については、土日にも学校管理委員がいて、その方に任せてある。教員の対応については、保護者ボランティアがお願いできなかったとき(年に5回くらい)だけ、1回につき校長教頭も含め3人のローテーションでお願いしている。このように、飼育担当の先生だけに負担をかけないような配慮をしている。ただ、ボランティアが来てくれるときでも、校長か教頭のどちらかは、できる限り出向くようにしている。

<中川>

